

奈留島

「まちづくり」に自主的に取り組む島



調査レポート SURVEY REPORT

2018年6月末、世界文化遺産に認定された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン遺産」。その構成資産の一つ「奈留島の江上集落」のある五島列島 奈留島（長崎県五島市奈留町）は、水産業が盛んだった1960年代に人口9千人を数えていたが、現在は2千人台に減少し、他の離島と同様、人口減と少子高齢化の進行から、将来のコミュニティの存続が危ぶまれている。

そのようななか、奈留島にはITターン者に行政と地元民間組織が協力して新たな交流拠点がオープン。また、自主的に観光客との体験交流に取り組み続ける島民の存在など、島の“これから”を創造する機運が満ちている。

奈留島

長崎

ユースと世界遺産の島

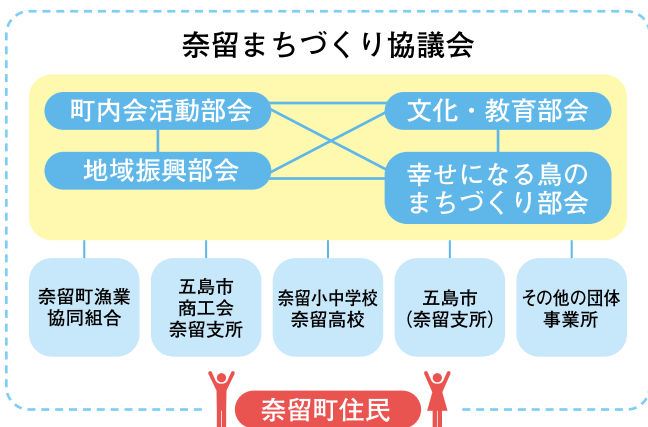
奈留島は、長崎市から約100km離れた九州の最西端、五島列島のほぼ中央にあり、荒井(現・松任谷)由実さんの名曲『瞳を閉じて』の舞台となった島として、フアンの間では以前から有名である。さらに、2018年には島内にある江上天主堂を含む周辺の集落一帯が、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産「奈留島の江上集落」として世界遺産に登録されたことから、観光客にも注目される島となった。



▲松任谷由実さん直筆の歌碑

イターン者の情熱に呼応

奈留島では、イターン者に行政と地元民間組織が協力して、まちなかに空き家を活用した新たな交流拠点を生み出したり、自主的に体験交流を行う島民など、まちづくりが活発に行われている。島では、まちづくり活動に取り組む民間組織「奈留まちづくり協議会」が、長崎県と五島市の事業を活用しながら4つのまちづくり事業に取り組んでいるが、そのなかの成功事例が民間交流・体験拠点「Herbal Forest」の開設である。



rest」の開設である。

同施設の開設は、夫が奈留島出身で、自身は東京都出身のハーブインストラクター・北川栄恵氏が、島に里帰りする度にだんだん活気がなくなってきたことを肌で感じるようになり、「このままでは、夫が生まれ育った故郷はなくなってしまうのでは」と寂しさを覚え、何か自分にできることはないか、と行動を起こしたことがきっかけとなっている。この北川氏の思いに応えるべく、奈留島まちづくり協議会が長崎県の支援事業《空き家活用

プロジェクト事業》を、地元・五島市が《空き家活用促進事業》をそれぞれ活用して、島に住む北川氏の義父から紹介されたまちなかの空き家物件をリノベーションし、五島列島初のハーブ工房施設「Herbal Forest」を昨年5月にオープンした。

まちの交流拠点の誕生

同施設は、クラフトづくりなどの体験ができるハーブ工房と、島民が会合などに利用できるレンタルスペースを



▲ハーブインストラクターの有資格者、北川栄恵氏

備え、オーナーには北川氏が就任してハーブティーの販売を行っている。さらに、昨年8月にはカフェを併設して施設内でハーブティーを飲むことができるようになった。

同施設で使用するハーブは島外から取り寄せるだけでなく、島内でも栽培している。また、北川氏が奈留島に移住したばかりの2016年に、地元でかんころもちを作っている松村菓子店の協力のもと完成させていた、かんころもちに奈留産ハーブを混ぜた「ハーブかんころもち」を、カフェメニューの一つとして顧客に提供している。なお、同商品は、現在も使用する葉の分

今後の展開など

量やパッケージデザイン、量の確保や売り方などを模索しており、将来的には奈留島の新たな土産品として売りだす予定である。

「Herbal Forest」の切り盛りは北川氏独りで、また、ハーブの栽培を北川氏と義父の二人で行っているために、両名とも毎日大変忙しい。また、北川氏は東京に残っている夫のために、たまに上京しなければならず、不在の間は2週間程施設を閉めなければならぬ。そのため、パートナーの確保が急務となっている。

北川氏のパートナーについては、ハーブの資格を取りたいという島民も出てきていることから、2019年度に簡単な資格を取得できるハーブ講座を島内に開講することで、島民から有資格者を輩出し、北川氏不在の際に対応してもらう予定である。



▲「Herbal Forest」の店内(カフェスペース)



▲「Herbal Forest」の店内(右側奥がレンタルスペース)



▲「Herbal Forest」の外観

土産品の製作と体験場設置

奈留島の属島・葛島^{かづしま}出身の葛島三兄弟^{くさしま}(長男・葛島義信氏、次男・広春氏、三男・信広氏)は、江上天主堂が世界遺産の暫定リストに掲載された2007年当時、仕事の大工業が不振で時間に余裕ができたため、来島者が増えつつあった奈留島に土産品がないことに着目し、余った木材を加工した趣味的木製ストラップ「でばヒラキ」を作成して、島内で行われた世界遺産イベントなどへの参加者に提供し始めた。すると、これが評判を呼び、2010年の五島市主催「新おみやげ発掘コンテスト」で2位入賞を果たした。



▲三兄弟工房の代表商品「でばヒラキ」

これがテレビや新聞にとりあげられたことで、2012年には長崎県から首都圏イベントへの参加要請があり、自社商品を出品するとともに、来場者に木材加工体験を行ってみた。この加工体験における来客者の反応に手応えを感じた彼らは、島に戻ると観光体験場「三兄弟工房」を設置した。

島の観光交流体験施設

「三兄弟工房」における兄弟の役割分担は、型をつくるのが次男・広春氏、焼くのは三男・信広氏。長男・義信氏は、自ら各商品を作成しながら全体の統括に当たる。また、2017年に義信氏の長男・勝幸氏が奈留島にUターンして以降、三兄弟+1の4人体制となり、修学旅行をはじめとする観光客への木工交流体験など、奈留島における観光体験交流の中心的存在となった。

一方、同工房は旅行ツアー「五島列島キリシタン物語」の体験メニューにも組み込まれているが、来客を事前に把握できることが、本業の大工業優先を可能としている。ところが、近年は



▲三兄弟+1の面々



▲三兄弟工房の外観



▲工房製作品の数々

急に訪ねてくる個人観光客も増え始めており、工房のイメージを損なわないよう、三兄弟とも大工仕事の現場から工房まで極力駆けつけている。

工房の課題など

三兄弟工房の強みは、本業が大工業のため、他の木材加工体験施設と異なり、わざわざ材料を購入する必要がなく、また木材を加工するための機械を改めて購入する必要がないことにある。しかしながら、義信氏の長男・勝幸氏を合わせても4人しかいないために、商品を定期的に一定量供給できない悩みを抱えている。他方、観光交流体験については、一度断ってしまえば観光客が次回から奈留島に来てくれなくなることから、予約が入った時には必ず対応するようにしている。

また、工房への土産品や記念品の製作注文は増えてきているものの、利幅は本業の大工業の方が大きいことも悩ましい。

まちなか散策がオススメ

このように、奈留島では五島列島のなかでも面白い取組みが広がっており、世界遺産に目が行きがちになるなか、漁業の島から訪れて楽しい島へと変貌した。

奈留島でのまちづくりには、全国のまちおこしによくいる“プロ”は携わってはならず、東京から来た北川氏、地元葛島三兄弟ともに、自分でできる範囲で島のために貢献していかうと自主的に動いている。

「Herbal Forest」の開設には、まちづくりの経験がない北川氏に地元が協力した。また、葛島三兄弟が始めた木工体験は、奈留島における観光体験交流の始まりとなり、三兄弟工房は島の交流拠点として輝きを放っている。

奈留島訪問にあたっては、世界遺産『奈留島の江上集落』を訪れるだけで島を離れるのではなく、まちなかまで足を運ぶことで、島の本当の魅力に触れることができるのである。



▲城岳展望台より相ノ浦湾方面を望む

■ 株式会社長崎経済研究所 代表取締役社長 小川 洋

当社は、1989年に設立された十八銀行の関連会社で、長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活に役立つ情報を提供するとともに、ITコンサル、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しており、創立30周年を迎える。

本年3月より、長崎県在住の方を対象とした地域密着型のインターネットアンケートサイト「リサチャン」[Research@N:リサーチアットナガサキ]の運用を始めた。長崎の生活者視点でリサーチを続ける(有)みかんコミュニケーションズと連携して運営しており、これまで難しかった長崎県民の声をスピーディに集められるツールとして、県内マスコミでも幅広く紹介されている。

